

海風通信

発行者：SBC東京医療大学
学長 山之口 美喜生

〒279-8567 千葉県浦安市明海5丁目8番1号
TEL：047 (382) 2111 (代表)

第42号

42号 目次

【特集】卒業生に贈る言葉

「Boys, be ambitious.」もいいが「Be gentleman.」の言葉を贈ります
学長 山之口 美喜生 2-3

明日、なにをする？
医学教育センター 中島 琢磨 4-6

卒業を迎える皆さんへ
教養部長 山田 利彦 7

卒業生に贈る言葉
理学療法学科 中村 浩 8-9

「一日一生・人生二度なし」
整復医療・トレーナー学科長 大澤 裕行 10-11

卒業を祝う 一流の看護専門職業人を目指せ!!
看護学科長 佐藤 みつ子 12-13

彩
学友会 会長 小田嶋 唯澄 14-15

SBC東京医療大学生の書評拝見! 16-18

新着図書紹介 / 編集後記 19-20



SBC東京医療大学附属
図書館HP SBC東京医
療大学附属図書館HP

◀ 図書館報の閲覧ができます。図書館HPへGo!

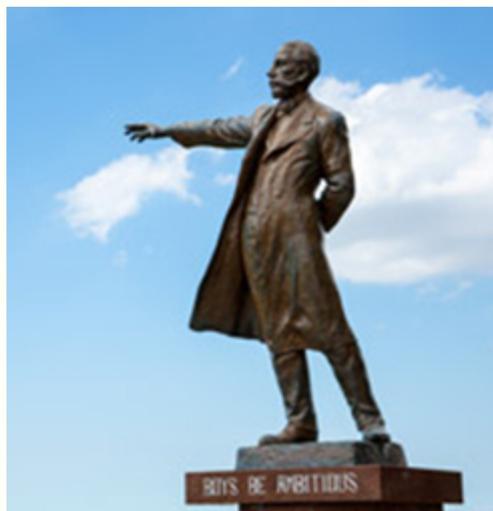


「Boys, be ambitious.」もいいが「Be gentleman.」の言葉を贈ります

学長 山之口 美喜生

Boys, be ambitious は、William Smith Clark 「ウィリアム・スミス・クラーク」の言葉としてとても有名ですね。

彼は明治9年(1876年)9月、札幌農学校(現北海道大学)に初代教頭(実質は校長)として米国より招聘され、来日しました。短期間で農業指導を行う目的であったため、任用契約期間はわずか8ヶ月余でした。有名な「Boys, be ambitious.」という言葉は、明治10年(1877年)4月16日、契約任期が終了して母国マサチューセッツ農科大学の学長職に戻るために帰国する際、1期生16名に馬上より訓示したとされる言葉です。現場に学生としていた安藤幾三郎氏の記録等を基にクラーク氏がその時に発言されたと言われる内容を紹介します。



"Boys, be ambitious like this old man.

Be ambitious not for money or selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be."

【直訳】

「この老人(私)でさえそうあるように、あなたたち少年も野心的でありなさい。しかし、金や利己心を求めるのでもなく、名声と言うつかの間のものを求めるような野心であってはならない。人間としてあるべき全てのものを求めるための大志でありなさい」

【翻訳】(当時は男子校だったためにBoysと呼びかけたが、意図は若者へである)

「若者よ、大志を抱け。金のためではなく、私欲のためでもなく、名声という空虚な志のためでもなく、人はいかにあるべきか、その道をまっとうするために大志を抱け」

Boys, be ambitiousは以上のとおりですが、ここで私が紹介したいのはクラーク氏の信念を表わしたもう一つの言葉『Be gentleman』です。

彼は札幌農学校の校則についても、「この学校に細かい規則はいらぬ。『Be gentleman』で十分である」としました。Boys, be ambitiousの陰に隠れていますが、有名な言葉です。

それまで士族の子弟(札幌農学校は士族の子のための学校でした)が、がんじがらめの細かい徳目(忠誠・孝行・信義・廉恥・礼節・勇武・仁・自己規律などの心得集)に縛られていたのと比べると、『紳士たれ』だけとはいかにも簡潔な表現です。

しかし、基準や指針が何も無い中で自分を律し、何をして良いのか、何をしてはいけないのかを自分で判断し、自らの行為とその結果に責任を持って…ということなのです。

自由でありながら実は大人としての自立を求める、大変厳しい規則だとも言えます。

私は社会に巣立つみなさんへの餞(はなむけ)の言葉として、Boys, be ambitiousという言葉よりも、この「Be gentleman」という言葉を贈ります。

自分のことを客観視出来て、自己の責任を認知できる、これこそが自立であり、そこから自律が可能となります。周りが悪い、あいつが悪いとばかり文句を言っている責任転嫁と他罰思考の人は、結局は不和しか生まず周りが迷惑です。本人も不幸なのではないでしょうか。そしてBe gentleは優しくあれです。優しさを持った自立した人間。これこそが本学の卒業生です。それを誇りとしてください。

【医療人となる諸君へ】

良き医療人を目指し、自立した大人として、さらに精進してください。入学の動機や過去の成績は問いませんし、さほど重要ではありません。劣等感もプライドも捨てて欲しいと思います。

努力する者は必ず報われます。しかし、怠惰な者は必ず駆逐されます。

未来の自分の為に。そして未来の患者さん達の為に。奮励努力してください。

『過去と他人は変えられないが、未来と自分は変えられる』 Eric Berne(精神科医)

みなさんの前途に、心からの応援を送ります。

卒業おめでとう。

明日、なにをする？

医学教育センター 中島 琢磨

明日、なにをする？

バイトかな？ それとも、就職先の研修？ 実習？ 卒業旅行？ それとも、何も決まってないし、思いつかないかな・・・

どれも正解だと思う。世界中が不確かで信頼できることが少なく、不安に包まれているから、今できることを楽しんで。何も決まっていないなら、自分の時間を楽しんで。

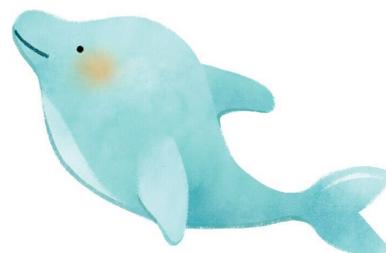
いきなり、なんだか不穏なことを書いてるように思えるかもしれない。けれど、素直な心でまっすぐ世の中を見ることは、これから生きて行く上でとても大切だ。

これから卒業するみんなが大学に入学する頃、2022年の3月にロシアによるウクライナ侵略が始まった。2023年10月のハマスによるイスラエル攻撃に端を発した、イスラエルによるガザ地区などを対象とするパレスチナ人大規模殺戮も、まだ完全には収束していない。それ以前から中華人民共和国により繰り返される南シナ海等における領海拡大行為は、フィリピンやベトナム、日本も巻き込んでいる。昨年始めからアメリカ合衆国の首長は、米国主要公機関・軍隊幹部を自分への忠誠を誓う白人男性優先に交代させ、合衆国法・国際法を無視した国際秩序の破壊にも勢いを増すばかり。

なんだか世界中が、金と力を持つ男たちの率いる3つの大国に支配され、力や金のない国と民族は、主権も、住民の命も人権も紙くずのようにされ、やりたい放題踏みにじられてる。暴力を振るう理由は自己中心的な正義。根拠が不明確だったり、矛盾していたり、嘘が使われ、情報操作は当たり前になった。直接の当事者でない国やグループのリーダーたちは、暴力を振るう国・グループやそのリーダーに逆らえないで迎合してる。まるでクラス内でいじめや暴力が蔓延し、周りの友達は見ているのに知らんぷりをしているようだ。

日本だって、例外ではない。

(中略)



「個性を大切にする」「多様性を認める」という発想はせいぜい2~30年前くらいから広がってきたけれど、その発想は古い教育を受けた人々の「道德意識」を刺激し、反発を招いた。「個性」や「多様性」は、「目の前の利益」につながらない限り認めようとしなない人々が、世界でも大国と言われる国々のトップに立って政治を動かしている。政治や企業のトップに立ち国や世界を動かす人々について、「人々の幸福のため良心に従って行動する義人」「善人」であるという解釈は、「個性」や「多様性」を認めない社会では誤解に過ぎない。そのような社会のトップたちは、自国の、自社の利益確保が「正義であり」、対立するものは「不正義」であり、「敵」となるからだ。

AI(人工知能)の劇的な進歩は、力や経済力を持った少数の人々にとって「人間の大部分は不要な資源の消費者」という認識につながり、その結果が人権や人命の軽視につながっていく可能性もある。その可能性について、たとえば芥川龍之介の「河童」や、手塚治虫の漫画「火の鳥 太陽編」などを読むと、過去の作家がこれからの世界を予言していたかのような気分になる。

どうだろう？

これらの事実に対して、いいことだとか、悪いことだとか、政治的、宗教的な判断を押しつけるつもりはない。考えたくないし、認めたくないし、反発したくなると思う。たとえ「へえ、そうか」と思っても、「じゃあ、どうすればいい？」には、答えなんて見つからない。だから、今まで読んできたことを否定してもいいし、納得しなくていい。だって、いろいろ予測したって、この先何が起こるかわからない。国や自治体にしても、組織の運営にしても、その方針を決めるのはトップに立っている人で、その人を説得することはほぼ不可能。ただこれからも事実が積み重なっていくだけだ。

それより、これから医療人として生きて行くみんなには、見失ってほしくないことがある。

政治や世の中の動きは人の思いや主観が「正義」を決めるけれど、人の身体の命や健康は不変のメカニズムで成り立っている。もちろん、一人一人に筋肉の発達や運動能力、柔軟性、体力、免疫力に違いがあるなど、個人差は存在する。けれど、その個人差も、遺伝子やその組合せの違いによって起こる。命のしくみの全体は、まだわからない事だらけだけど、科学的客観的に証明されたことに基づく医療は、多くの人々の健康を支え、命を救うことができている。

だから、医療人として巣立つ君たちには、「医療は科学的根拠に基づく」という信念を持ってほしい。

世の中がどんなに変わっても、科学的根拠のない人の思い込みや主観が健康や命を守ることはない。医学的に認められていないのに「有効」な治療法があるなら、その治療法は命のメカニズムに基づく根拠があるはずだし、もしかすると思わぬ「副作用」があるかも知れない。だから、人の健康や命に関わる医療は、根拠や副作用を明らかにしない限り、人に用いてはならない。それは美容医療も同じだ。

もし、インターネットやSNSで魅力的な情報や「完全に治る」などの言葉を目にしたら、「誰かが言っていた」などの「人の言葉」を信用しないでほしい。信用するのは、根拠となる論文の実物と、根拠を示すために行われた実験研究の具体的なデータを確認してからだ。

これについて、私自身が経験したことを少しだけ書こう。

自分の実験研究の論文を発表しようと悪戦苦闘していたとき、ある「科学雑誌」からお誘いが来た。その編集者のトップは、有名大学の教授だといふ。ちょっと嬉しくなってその雑誌に投稿しようと準備したが、その教授の所属する有名大学のホームページを確認したら、その教授の名前がない。「あれ?」と思って、雑誌の編集者リストにあった名前を片っ端から調べたところ、それぞれの「所属大学」に名前はなかった。「ニセ科学雑誌」だったのだ。

このような「ニセ科学雑誌」を「ハゲタカ・ジャーナル」と呼ぶ。雑誌に研究論文を投稿するとき、適格性審査(査読)のための費用や出版費用を支払うのだが、「ハゲタカ・ジャーナル」はその費用を水増し請求したうえ、きちんとした査読をせず、いい加減な論文でもインターネット上に「論文記事」として公表する。だからその雑誌の記事は信頼できないし、その雑誌に掲載されてしまうと、研究者・科学者として世界的に信用を失うくらい、「医学的根拠のないいい加減な研究論文」が並んでいるのだ。

インターネット上で「医療詐欺」を行う事業者たちは、そのような「ハゲタカ・ジャーナル」にお金を払い、自分たちに都合のいい「ねつ造論文」を掲載する。その上で「一流科学雑誌に掲載された」などとして、薬や美容液、医療器具を販売する。

君たちが医療を行うとき、あるいは治療法について説明するとき、「ハゲタカ・ジャーナル」に掲載された論文を「根拠」としたら、相手の健康どころか、命を危険にさらすことになる。

だから、君たちには医療人として、インターネットでも、一般雑誌でも、新聞でも、テレビでも、AIによるまとめ記事でも、単純に信ずるのではなく、情報の根拠をきちんと確認する「ファクトチェック」を大切にしてほしい。

君たちが自分自身の人生を楽しみ、そして医療人として、確かな「根拠」に基づく医療行動によって人々を守り癒して行けることを、心から願い祈っています。

卒業を迎える皆さんへ

教養部長 山田 利彦

様々な思いと希望を胸に本学へ入学し、卒業の日を迎えるまで、振り返れば決して短い時間ではなかったと思います。楽しいことや嬉しいことも数多くあった一方で、特に最終学年、国家試験に向けての期間は、本当に大変な日々であったことと思います。

私は機会あるごとに本学の学生に伝えていますが、SBC東京医療大学に入学するということは、高校生の段階ですでに「将来、人を助けたい」「人のために働きたい」という明確な目標を持っていたということです。その志は、皆さんが思っている以上に尊く、誇るべきものです。そして、入学当初に抱いた目標に向かってぶれることなく、日々コツコツと努力を積み重ねてきたからこそ、卒業の日を迎えることができたのだと思います。

これから皆さんは社会に出て、医療人、トレーナー、教員、会社員など、それぞれの分野で第一歩を踏み出していくこととなります。学生から社会人へと立場が大きく変わり、同時に責任も一段と重くなります。それぞれが「こんな仕事がしたい」「将来こうありたい」という思いを胸に、職場を選んだことでしょう。困難な場面も多々あると思いますが、ぜひ日々、何事にも真摯に、一生懸命取り組んでください。

ドラマでは、若手のうちから大きな仕事を任せられ奮闘する姿が描かれますが、現実はその簡単ではありません。社会人としての毎日の中で、一つひとつの仕事を丁寧に積み重ねることで初めて信用と信頼が生まれ、「〇〇なら任せられる」「〇〇なら安心だ」という評価につながります。その先にこそ、次のチャンスが与えられるのです。その結果、忙しい人はより忙しく、そうでない人はそれなりにと、立ち位置も自然と変わっていきます。ぜひ皆さんには、全力で仕事に向き合う前者の社会人を目指してほしいと思います。

「同じ釜の飯を食った仲間」と言いますが、大学時代の仲間は、これからの人生においてもかけがえない存在です。私自身、同期や先輩、後輩と会うと、年齢に関係なく一瞬で大学時代に戻り、いつも同じような話で盛り上がりながら、絆を深めています。こうした関係は本当に貴重です。ぜひ皆さんも、これからも大学時代の仲間との縁を大切にしてください。

そして、何かあっても、なくても、先生方はいつでも皆さんが大学に顔を見せてくれることを楽しみに待っています。ぜひ、気軽に大学を訪れてください。

皆さんのこれからの人生が、実り多く、素晴らしいものとなることを心から願っています。

卒業生に贈る言葉

理学療法学科 中村 浩

卒業を控えた皆さん、国家試験への準備や就職活動、本当にお疲れ様です。看護師、理学療法士、そしてアスレチックトレーナー・柔道整復師として、それぞれの専門性を磨き、いよいよ「現場」へと羽ばたく皆さんと一冊の本を通して、これからのキャリアに欠かせない「医療従事者の価値とその対価」について共有したいと思います。

今回ご紹介するのは、解剖学者・養老孟司氏の著書『バカの壁』です。この本は私の愛読書ベスト10に入る一冊であり、発行された2003年は、奇しくも皆さんの多くがこの世に生を受けた年でもあります。当時、社会現象を巻き起こした大ベストセラーですので、タイトルを耳にしたことがある方も多いでしょう。

養老氏は本書の中で、人間は自分の脳に入ることしか理解せず、知りたくないことに対しては情報を遮断してしまう、この境界線を「バカの壁」と呼びました。この壁は、医療・保健業界と一般社会の間にも厳然と存在しています。特に皆さんが将来的に直面するであろう「医療・福祉従事者への報酬や経済的評価」を巡る課題は、この壁が引き起こしている構造的な問題といえます。

人の生命や身体を支えるエッセンシャルワークは、極めて公共性の高い仕事です。しかし、現状の日本において、その専門性や責任の重さにふさわしい「報酬」が必ずしも十分に確保されているとは言えません。「医療やケアは献身的な奉仕であるべきだ」という社会的な思い込みや、制度上の制約が、正当な対価への理解を阻む「壁」となっているのです。

養老氏は、「知るということは、自分が変わることだ」と述べています。皆さんが高度な専門知を身につけることは、患者さんの「壁」を取り払う手助けをすることに他なりません。同時に、自分自身の労働価値についても「壁」を作らず、客観的に社会を俯瞰する目を持つてほしいのです。「自分たちが提供している技術には、これだけの価値がある」という自負を持ち、それを社会に説明できる論理を持つこと。その価値が必ずや報酬を巡る構造的な問題を打破する第一歩になります。臨床スキルを磨くことはもちろん、社会保障制度や経済の仕組みについても、ぜひ図書館の資料を手にとって学んでみてください。

皆さんが生まれた年に世に出たこの本は、今もなお、私たちが社会とどう向き合うべきかという鮮烈な視点を与えてくれます。皆さんの技術が正当に評価され、誇りを持って活躍できる未来を、心より応援しています。



『バカの壁』 養老 孟司 著 (新潮新書) 新潮社 2003.4

【請求記号:304||Yo】

小説・読物(文庫)コーナーにあります。

「一日一生・人生二度なし」

整復医療・トレーナー学科長 大澤 裕行

まずはSBC東京医療大学ご卒業、本当におめでとうございます。諸君を宝と大きな期待と共にここまで大切に育て上げ、無償のスポンサーでもある御両親もさぞお喜びのことと拝察し、共に心よりお慶び申し上げます。

4年間或いは5年間、卒業生諸君は資格取得のための多くの試験に追われ、きっと自分なりに辛く厳しい地獄のような学生生活を送って来たと、ある意味誇りに自負している最中だと思えます。しかしながら、明日からもっと厳しい現実が待つ実社会に雄飛しようとしている君達に、ありきたりではありますが必ず役立つ先人の名言を贈ります。それは、私がいつも事ある度に口癖のように諸君に説いてきた「一日一生、人生二度なし」という言葉です。世の中には山のように数多の格言や哲理があり、それぞれ人生の真実真理を突き心を貫きますが、人生の要諦はこの「一日一生、人生二度なし！」という短くシンプルな言葉の中にすべてが補完集約され、これ以上の格言は他に無いと言っても過言ではありません。かの教育者の鑑であった重鎮森信三先生。同じく教育者で敬虔なクリスチャンの偉人内村鑑三先生。そして前人未到の「千日回峰行」を二度達成した比叡山延暦寺の酒井雄哉大阿闍梨、そして100歳を超えて尚、名門聖路加国際病院長であった日野原重明先生まで、枚挙に暇がない位多くの先哲達が必ず唱えている唯一無二の座右の銘です。「その日一日一日を大切に生きる」なんてフレーズは、言い古された至極当たり前のことだよと皆、頭では理解出来ていても、年若く苦悩の少ない諸君には全くそんな実感も湧かず、今日一日を人生の最期と思い大切に生き抜かねばという深い気付きや、今この「一瞬」を力の限り精一杯生き切るという学びに覚醒することすら困難を極めること必定です。

この混迷混沌を極める現代、世の中は二極化して大きく分けて二種類の人間に大別されることに気付かされます。東洋医学の陰陽二元論もそうですが、丁度2000年頃に一世を風靡した米国日系4世ロバート・キヨサキ著作の『金持ち父さん貧乏父さん』の著書が看破したように、何事に於いても先ず世の中は勝者と敗者に大別され、次にお金持ちと貧乏人、そして搾取する人と搾取される人、EmployerとEmployee使用者と労働者、幸運な人と不運な人、多幸な人と不幸な人、健康な人と病気の人、そして善い人と悪い人。一体どんな因果があって両極化しているのか分かりませんが、中間という中途半端な括りは稀有で必ずどちらかに識別できます。



『一日一生』新版
内村 鑑三 著
教文館 1997.12

特に二極化の一つ貧富の差で言えば、97.5%程の一般的貧困層が、世の中の僅か2.5%の搾取富裕層にあまねく支配され、哀しいかな益々貧困地獄から抜け出せないままで生きています。非情な現実を提示すれば、片や、貧困故に愛する子供を抱え高層ビルから飛び降り心中する父親、そしてそのポケットには鉛筆書きのたどたどしい子供の遺書と10円玉一つという現実。その壮絶な最期に、追い詰められた親子の苦悶と悲痛が垣間見られ、貧困はかくも人間を卑屈かつ狂気に走らせるのかと改めて深く考えさせられます。かと思えば資本主義社会の常で、日本中の僅か2.5%程度ですが、金の亡者となり栄達の余り法外な脱税三昧に陥り、驕奢な豪邸や多くの別荘を持ち、超高級車を乗り回しクルーザー・パーティに現を抜かずビリオネアまで、滑稽皮肉な様相は年々加速度を増して世の中を両極化し席捲し続けています。良「お金や名誉のために生きるにあらず」と貪欲に生きることを嘲笑しますが、むろん、日々の生活に窮すること無く過不足なく生きられればそれに越したことはありませんが、貧困は人を修羅に陥れます。

卒業生諸君が将来、自らの最善を尽くし雄飛して、諸々の艱難辛苦を乗り越え健康で勝者、勝ち組となり、幸運幸福を掴みとってくれば教師としてこれ以上の喜びはありません。しかしながら如何せん、日々の努力義務は自分にありますが、結果である成功栄達は天の采配の領域です。私達はただただ一瞬の毎日を誠実に生き抜くことしかありません。ありきたりの祝辞で「一日一生、人生二度なし」と簡単に美辞麗句を掲げたものではありません。このように本当に人生を生き抜くには強い意志、信念が必要なのです。「昨日や過去を思い煩わず、明日未来を憂えず、今日を清く潔く生きよ」の言葉通り全身全霊で誠実に生きて下さい。「今、此処」「Now and Here！」真実はこの二語の中にしか存在しないのです。詰めて繋げると「Nowhere！」「これ以外何処にも何も存在しない！」人生100年時代、まさに若い諸君にとっては残り80年もあると安穩としていると思いますが、この真理に気付けば、あっという間の束の間の人生ということに気付かされます。この真理に、いち早く気付いた人こそが本当の意味での人生の勝者です。そしてもし将来、諸君が大成して大きな事業を成し遂げようとも、つまらないちっぽけな掃除を続けようとも、それ自体に貴賤や優劣は全くありません。流行に流されず信念に従い、如何に今日一日を有意義に誠実に生きたのか、それこそが一番肝心なことです。今日を生き切れ。決して今日一日を空費してはなりません。くだいようですが、どうかこれからの人生を強かに、一日一日を噛み締めながらそして誠実に徹しながら生き抜いて下さい。貴方の「命の砂時計」は今も止まることなく確実に落ち続けています。一人でも多くの卒業生諸君が何とかこの駄文を一読して、私の真意を汲んで幸せな人生を歩んでくれることを祈願して。

合掌

卒業を祝う 一流の看護専門職業人を目指せ！！

看護学科長 佐藤 みつ子

卒業生の皆様、ご親族の皆様、ご卒業誠におめでとうございます。この日を迎えられたこと、教職員一同、心よりお祝い申し上げます。

卒業生の皆様、SBC東京医療大学での学生生活は、日々充実していたことと思います。卒業は一つの区切りであり、同時に就職、進学とそれぞれの道に進む新たな始まりでもあります。皆様は、一流の看護専門職業人を目指す者としての心構えはできていますでしょうか。

今、我が国は少子超高齢社会となり、医療を必要とする高齢者が増加し、看護職への期待も大きくなっています。また医療技術も進歩し、看護においても専門的な知識や技術が求められるようになりました。

そこで、皆様の卒業にあたり、一流の看護専門職業人として心得てほしいことを3つ申しあげたいと思います。

一つ目は、人間性を磨き倫理観の高い専門職業人になって欲しいと思います。

人間性を磨くために、まず自己理解を深めることです。これは、自分の強みや弱み、価値観を知り、自分らしさを求めるということです。また、自分の価値観は、本を読んだり、様々な人と交流したりすることで自分とは異なる多様な価値観に触れ、自分の視野を広げ、深めることができます。

卒業後は、いろいろな経験をされると思いますが、経験したことを振り返り、その経験にどのような意味があったのかを考えることが成長につながるのです。学生時代は、経験したことを教員や指導者から振り返るよう促され、意味づけを引き出してくれました。しかし、卒業後は、自分自身で経験したことを振り返り、意味づけすることが必要になります。成功も失敗もすべての経験を積むことで人間的な成長の糧となります。

高い倫理観を育むためには、社会的なマナーを身につけ、自分だけでなく周囲の人々への配慮をすることから始まります。看護の対象者は、病気や障害がある人が多くいらっしゃいます。相手の気持ちを考え、理解しようと努める思いやりの心、相手を敬い寄り添う心、優しい誠実な態度で接し、自分の言動が周囲に与える影響を考え責任ある行動を心がけて欲しいと思います。

二つ目は、看護の専門性を身につけ独自性を発揮してほしいと思います。

独自性をもつためには、看護専門職業人として、看護に対する自分の信念である看護観を持つことです。自分はどのような看護をしたいのか、患者さんにどう向き合いたいのか等、看護に対する姿勢と一貫した考えを持つことです。

安全で質の高い看護を提供できるよう看護の専門知識、技術を備えることが基盤となります。看護活躍の場が地域医療や在宅ケアなど、病院以外の場所にも拡がり、看護師自身が判断して行動する場面が増えています。また患者さんのニーズが多様化し、看護師だけでは患者さんのニーズを満たすことが難しくなっております。患者さんに最善のケアを提供するためには、他職種と連携、協働することが求められています。他職種と信頼関係を築けるようコミュニケーション能力を身につけ、看護の専門性・独自性を発揮してほしいと思います。

三つ目は、継続的に自己研鑽する姿勢をもち積極的に学び続けて欲しいと思います。

先輩看護師が新人看護師に求めることの調査において、一番多かったのは積極的に学ぶ姿勢を持ってほしいということでした。社会は常に変化し、医療は日々進化しています。看護職者には、柔軟な思考で物事に対応する力が求められています。そのためには、様々な経験から学ぶとともに、最新の知識と確かな技術を積極的に習得して欲しいと思います。これらのことは一朝一夕にはいかないものです。常に学び続ける姿勢が大切です。例えば、仕事でうまくできないことがあったり、不安な時には、謙虚な姿勢で先輩に質問したり、わからないことなどは調べたりして、積極的に学ぶことが必要です。小さな成功体験を積み重ねることで自信がつきます。それらの経験一つ一つが、皆さんを大きく成長させてくれるはずです。

最後に、一流の看護専門職業人になるという高い目標を掲げ、覚悟を持って新天地に向かい、果敢にチャレンジして欲しいと思っております。新たなことに挑戦し、自分の看護を創造するという熱意を持ち続け、未来を切り開いていくことを期待しています。未来は皆様が創っていくのです。頑張ってください。



彩

学友会 会長 小田嶋 唯澄
整復医療・トレーナー学科2年

SBC東京医療大学の皆さん、こんにちは！学友会会長の小田嶋唯澄です。
2026年が始まり約二ヶ月が経ちました。どんな一年を思い描き、日々どのように
過ごしていますか。

私は一月に地元宮城に帰省し、二十歳の集いに参加してきました。晴れ着の
華やかさと新たな始まりにふさわしい「百花繚乱～芽吹き始める彩(いろ)～」と
いうテーマのもと、夢や希望を誓い合い、二十歳のことばを全員で読み上げまし
た。ラジオ局の突撃インタビュー取材では、両親への感謝を伝えました。懐かし
い顔ぶれに心安らぐと同時に、それぞれの場所でこれからも切磋琢磨しなければ
と刺激を受けた一日でした。

さて皆さんは、プロ野球パ・リーグ、東北楽天ゴールデンイーグルスの岸孝之
投手をご存知でしょうか。岸投手は宮城出身の41歳、一軍で活躍を続けるベテ
ランであり、高校まで宮城で野球をしていた私にとって大きな憧れの存在でも
あります。

その岸投手が昨年11月23日の契約更改後の記者会見で「200勝というところ
を頭の片隅に置きながら、頑張っていきたい」と発言しました。初めて公の場で
大記録への思いを明言したという岸投手。これまで一勝一勝、不屈の精神で歩
んできたであろう道のりと、今だからこそ言葉にしたことの意味、覚悟のようなも
のを感じました。

何かを成し遂げようとするとき、内に秘めた情熱を原動力とするか、口に出して行動力を高めるか。それが正反対であっても、どちらにせよ苦難を乗り越えて進み続けられる強い決意を持てるかどうか全てなのだと思います。

今年は60年に一度、エネルギーに満ち溢れる年と言われる丙午。新しいことにチャレンジするもよし、今の取り組みをさらに深め広げていくもよし。ここでもう一度、自分の目標を再確認してみませんか。

多様な個性と可能性を持つ私たち。さまざまな経験で学生生活をより一層豊かに彩っていきましょう。

最後に、卒業を迎えられる先輩方、ご卒業おめでとうございます。これまで共に歩み支えてくださったこと、学友会一同感謝申し上げます。新たなステージでも、大学で鍛錬された心技体を土台とし、ますます健康でご活躍されることを心よりお祈りしております。



SBC東京医療大学生の書評拝見!

『旅猫レポート』

理学療法学科 伴 優大

本書『旅猫レポート』は、有川浩による長編小説である。猫と人との旅を描いた物語と聞くと、温かく優しい話を想像しがちだが、本作はそれだけに留まらない。人生において本当に大切なものとは何か、そして「愛する」とはどういう行為なのかを、猫との旅という形を通して読者に問いかける作品である。感動的でありながら、静かに深く心に残る点が本作の特徴である。

著者の有川浩は、『図書館戦争』シリーズなどで知られる人気作家であり、エンターテインメント性と人間関係の温かさを両立させた作品を多く発表してきた。本作『旅猫レポート』は、その中でも恋愛要素を抑え、人と動物、そして人と人とのつながりに焦点を当てた作品である。有川作品の中では比較的静かな物語でありながら、読後の余韻が非常に強い一冊として位置づけられる。

本書は大きく前半と後半に分かれる構成となっている。前半では、元野良猫のナナと青年・悟の出会い、そして穏やかな日常が描かれる。後半では、悟がナナを手放す決意をし、飼い主を探す旅が描かれる。物語は旅先で出会う人々のエピソードを重ねながら進み、終盤で悟の事情が明らかになる。結論として、本作は「愛するとは相手の幸せを最優先に考えることだ」という答えを静かに提示している。

本作の最も優れた点は、猫・ナナの視点を通した語りである。皮肉混じりの軽妙な語り口により、重くなりがちなテーマが自然に読み進められる。また、悟という人物の優しさが押しつけがましく描かれない点にも好感を持った。読者に感情を強制せず、行動や人間関係から悟の人柄を浮かび上がらせる手法は非常に効果的である。全体として文章は平易で読みやすく、読書が苦手な人にも勧めやすい。

一方で、物語後半の展開についてはやや単純化されていると感じた部分もある。悟の選択は美しく描かれているが、別の選択肢や葛藤がもう少し描かれてもよかったのではないかとも思う。また、旅先の人物たちが皆一様に悟を評価する構図は、やや理想化されすぎている印象を受けた。現実には、必ずしもすべての善意が報われるわけではないため、その点には議論の余地がある。

本書を通して、私は「大切にする」という行為について考え直すことになった。ただ一緒にいることや、そばに置いておくことだけが愛ではないという視点は、自分の価値観に変化を与えた。相手の将来や幸せを考え、時には手放す決断をすることもまた愛なのだ気づかされたのである。本作は感動を超えて、読者の考え方に静かな影響を与える力を持っている。

『旅猫レポート』は、動物が好きな人だけでなく、人との別れや選択に悩んだことのある人に特に勧めたい作品である。人生の節目や、誰かとの関係を振り返りたいときに読むことで、心に寄り添ってくれるだろう。忙しい日常の中で、自分にとって本当に大切な存在は何かを見つめ直したいときに、ぜひ手に取ってほしい一冊である。



有川 浩[著] (講談社文庫)
講談社 2017.2
【所蔵なし】

SBC東京医療大学生の書評拝見!

『映画を早送りで観る人たち ファスト映画・ネタバレ・コンテンツ消費の現在形』

整復医療・トレーナー学科 佐藤 瑠乃

本書『映画を早送りで観る人たち』は、映画やドラマを倍速視聴したり、要点のみを消費する現代の視聴スタイルを題材にした評論である。単に「最近の若者は集中力がない」と断じているのではなく、なぜ人々が早送りで作品を見るようになったのか、その背景を社会やメディア環境の変化から考察しているのが特徴である。映画という娯楽を通して、現代人の価値観を読み解こうとする一冊であると感じた。

著者の稲田豊史は、映画ライター・編集者として長年映画にかかわってきた人物である。本書では専門用語を多用することは少なく、読者にも伝わりやすい語り口が意識されている。評論でありながら、エッセイに近いような柔らかさがあり、自身の体験と身近な例を挙げている点に書き手としての工夫が感じられる。

本書は倍速視聴やながら視聴といった具体的な行動から話をはじめ、そこから徐々に「物語をどう受け取るのか」「時間をどう使うのか」といった抽象的なテーマへと広がっていくような構成となっている。章ごとに話題は変わっているが、「早送りで見る」という行為が軸になっているため、全体として一貫性があると感じた。

本書の良い点は、倍速視聴の否定から入らないところであると考え。効率を重視する視聴スタイルを一概に悪いものとせず、そうせざるを得ない社会状況や、視聴者側の事情にも目を向けている点に説得力があると感じた。また「作品をどう楽しむかに正解はない」という姿勢が一貫しており、読者の考える余地を残している点も評価できると感じた。

一方で、倍速視聴をする側に寄り添いすぎているのではないかと感じる部分もあった。作品が本来持っている間や沈黙の価値自体に触れてはいるものの、その損失の大きさについては少し弱いのではないかという印象を受けた。また映画製作者側としての意見や視点がもう少し入っていてもよかったのではないかと感じた。

本書を通して、映画の見方は単に個人の好みというだけでなく、社会全体のスピードや情報量とも深く結びついているということを学んだ。自分自身も無意識のうちに効率だけを重視して作品に向き合っていたことに気づかされ、もう一度立ち止まって考えてみるきっかけとなったと感じる。

本書は映画が好きの人だけではなく、動画配信サービス等を日常的に利用している人にもおすすめできる。作品と自分の、自分なりの向き合い方を考えるヒントになる一冊であると考え。



稲田 豊史 著(光文社新書)
光文社 2022.4
【請求記号:778||In】

SBC東京医療大学生の書評拝見!

『もう一度、抱きしめたい 脳性まひの僕に舞い降りたダウン星の王子さま』

看護学科 岡田 美海

私は、中村勝雄の『もう一度、抱きしめたい』を取り上げたい。本書は、重度の脳性まひを抱えて車椅子で生活している著者が、ダウン症の息子との日々の経験や家族のエピソードをもとに書いたエッセイである。障害者の声を伝えるだけではなく、障害を持つ人たちの視点から見える社会や子育て、家族のあり方、障害者問題について考えさせられる内容となっている。

著者の中村勝雄は、2001年に別作品で第8回小学館ノンフィクション大賞優秀賞を受賞している。受賞作である『バマラダイスウォーカー』は出版後、障害者を知るための10冊にも選出されたことがある。本書には、著者と息子との日常を通して、障害と共に生きる家族の姿や、障害者である当事者と親でもあるという二重の視点で描かれている点が特徴である。

本書は、著者とダウン症の息子との日々を振り返って書かれた作品である。前半では、著者が子どものころから抱えてきた、思うように体が動かない辛さや周囲の目線に悩んだ経験が紹介されていて読者は著者がどのような気持ちで生きてきたかを理解できる。次の章では、息子が生まれ、ダウン症と診断された瞬間の戸惑いや、抱きしめたいのに腕がうまく動かないという父としての切ない思いが描かれている。中盤では、息子の成長に関するエピソードが積み重ねられている。たとえば、はじめてパパと呼ばれた日や、手をつないで散歩したときの喜びなど、日常の中での小さな幸せや家族の絆の深まりが描かれている。また、保育園の先生や地域の人々との関わりも紹介されていて、障害があっても周囲の支えがあれば前に進めることが自然に伝わってくる。終盤では、障害は不幸ではなく家族に新しい視点を与えてくれたとまとめられていて、息子との未来への希望が語られている。

特に印象的だったのは、初めて息子にパパと呼ばれた場面である。この一言には、人の違いを否定せずに理解として受け止める大切さや、支え合うことで幸せや成長が生まれることの意味が込められていることを学んだ。

しかし、親の覚悟と限界はどこにあるのだろうかと考えさせられる場面もある。著者は前向きに書いているが、頑張る気持ちだけではどうにもならない日もある。親はどこで限界を感じ、どう気持ちを保っていくのかと自分ならどう向き合うかを考えさせられる部分もある。

この本を通して、私は家族との時間の尊さに気付かされた。毎日の小さな出来事や身近な人との時間をもっと大切にしたいと思い、幸せは自分が思っているよりも身近にあることに気付けた。できないことよりできたことを大切にする姿勢は、私にとって前向きに考える力となった。小さな成長に目を向けることで気持ちが軽くなり、日常の見方も変わった。

総じて、本書は医療・福祉の関係者や保育士、教師など支援や接し方を考える人、そして頑張りすぎてしまう人におすすめできる一冊である。寄り添う気持ちの大切さや、今のままでも十分であるという安心感を与えてくれる、心が温まる作品である。



中村 勝雄 著
東京新聞 2011.5
【請求記号:916||Na】



新着図書紹介

— 「人体」の深層に触れてみよう! —



『硬くて柔らかい「複雑系」骨のふしぎ
からだを支えるだけでない、知られざるはたらき』

石井 優 著 (ブルーバックス) 講談社 2025.5
【請求記号:491.16||Is】

骨の構造や成長、修復のしくみを通して、からだ全体を支える多面的な役割をわかりやすく紹介します。

小説・読物(新書)コーナーにあります。



『「人体」の中では何が起きているのか：“カラダ社会”をのぞき見る』

廣田 昌彦 [著] ベレ出版 2025.10
【請求記号:491.3||Hi】

身近なテーマを通して、人間の身体を新たに見つめ直すきっかけを与えてくれる一冊!



『アスリートのための筋トレ事典』

五味 宏生 著 マイナビ出版 2025.6
【請求記号:780.7||Go】

カラー図解! 目的に応じて引ける事典形式でわかりやすく解説しています。トレーニングの質を高めたい方におすすめ。

貸出できますのでご利用ください。

新着図書紹介

— 展示コーナーより：手に取ってほしい1冊 —

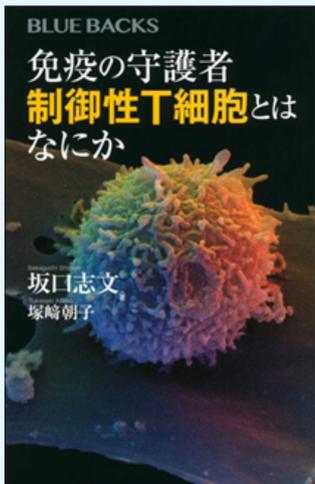


【学友会寄贈図書 展示コーナー】

『ガネーシャと夢を食べるバク』
(夢をかなえるゾウ0)

水野 敬也 著 文響社 2025.4
【請求記号:913.6||Mi||0】

笑って泣ける、自己啓発エンターテインメントの決定版。
軽快な語り口で、読書が苦手な方にもおすすめ。



【免疫学図書 展示コーナー】

『免疫の守護者 制御性T細胞とはなにか』

坂口 志文 塚崎 朝子 著
(ブルーバックス) 講談社 2020.10
【請求記号:491.8||Sa】

著者の坂口志文先生
2025年 ノーベル生理学・医学賞を受賞。

「制御性T細胞」関連の図書や雑誌を展示をしています。

現在、図書館では「学友会寄贈図書」「免疫学図書」「私の1冊・日本文学編」の3箇所
展示コーナーを開催中です！ 実習や国試対策の合間に、ベストセラー小説、最新科学の
「熱」に触れてみてください。そして古典から近現代文学まで、展示図書は貸出可能です。

編集 後記

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

これから始まる医療人、社会人としての道は、決して平坦ではありませんが、学び続ける姿勢が必ず
皆さんを支えてくれます。スマートフォンや短い情報に触れる機会が増える一方で、じっくりと一冊の本と
向き合う時間は貴重になります。忙しい毎日の中で、心に残る一冊と出会っていただければ幸いです。
皆さんのこれからの歩みが、豊かで実り多きものになるよう心より応援しています。(長谷川)